



かしわらゆきお  
柏原幸雄さん  
(昭和10年生まれ・80歳)



ほそかわともえ  
細川友恵さん  
(香川大学1回生)

コーディネーターより

かつて日本一の規模を誇った香川の製塩業。その最後の語り部が今回の名人、柏原幸雄さんです。今も宇多津の復元塩田で塩作り体験を指導され、製塩技法や浜引き歌を伝えていきます。最盛期には、宇多津の海岸線は見渡す限り塩田だったそうですが、昭和47年、化学製塩法の登場で伝統的な従来の製塩業は操業停止に。宇多津のまちは大きな転換期を迎えます。かつての塩田の賑わいからその終焉までを見つめてきた柏原さん。塩田業の収入は高かった反面、大変な重労働だったそうです。お話を聞いた細川さんも、当時の塩づくりの過酷さを、身をもって体験しました。薄れゆく塩田の記憶を、心と体で感じた聞き書きでした。

塩田の作業が一番つらいことって？  
一番つらいのは夏。晩に雨が降るやう。そうしたら、明るる日は(塩田の)砂がべたつとしてしまつとるからね。それ(表面の砂)を起こして、引っ付いてる砂をほぐして。ようやく、その日の塩田作業にとりかかる。それが一番きつかったなあ。重たいし、乾かさなあかんし、浜を引きずらなあかんのや。砂の温度は50度ぐらい。もう天然のサウナやな。裸足で作業しとると、足の裏が火傷するぐらい。ほんならかな、塩田しとる人にへん平足はおらんのよ。それに足の皮が厚い。タバコの火をばいっつと捨てて、ぱつと踏んでも2足か3足か歩いてらやつと気づく。熱い！って。火踏んでからだいぶ経つてんのに、お前つて。それぐらいの厚さなんです。

塩田をやつて良かったことは？  
そうですね、やつぱり根性ができたんとちやいますかね。人がやれることで、やれんことはないつちゅう。

昭和47年に塩田が廃止となりましたが、今までずっと身近にあった塩田がなくなつてどう思いましたか？  
そうやなあ、父親、母親がかわいそうやつたわな。結局、塩田のために生きてきたようなもんじゃありませんか。それが全部灰になつてしまふんやからな。私自身は、どうせこのままでは何か別の商売をするだろうと思つてたからな。まあ時代の移り変わりいかな。

柏原さんから見て、瀬戸内海ってどういうイメージですか？

宇多津の海の伝承者やから、みんなに広めないかん。

宇多津塩田最後の語り部 柏原幸雄さん(宇多津町)



1 お話を聞く前にまず塩田作業を体験。「浜引き」と呼ばれるこの工程では、馬鍬(まぐわ)で砂浜の表面に凹凸を作り、そこへ海水をひしゃくで散布する 2 太陽熱で水分を蒸発させ、乾いた砂を沼井(ぬい)と呼ばれる抽出装置に入れ、海水をかけて塩分を溶かす作業 3 1と2の作業を繰り返し、ようやくかん水(高濃度の塩水)ができる。これを煮詰めて結晶化させ、ようやく塩ができあがる 4 塩づくりを指導してくれた柏原さん。小柄なお体で簡単そうに道具を操るが、いざやってみると相当な重労働だ 5 復元塩田の全景。中央の盛り上がったところが沼井



私も塩田の子ですから。

柏原さんから受け取った言葉

入浜式塩田で働かれていた頃は、どのような生活だったのですか？  
毎日、朝4時ぐらいから作業して、もう明るいでしょ。だから太陽が出ないうちに作業してしまう。朝場が終わるのがだいたい8時前やな。昼は2時半頃ぐらいから、一斉にバーツと百何軒がお屋の作業に行くんやな。みんな同じ、一番太陽のきついついときに。夜は18時ぐらいに終わる。ごはんは、弁当持ってきてるよ。ほなけん、奥さん連中がしんどかった。朝の4時には、朝とお昼の2回分の弁当を用意せなあかんかったから。

塩田で作業されている方は、たくさん食べると聞きました。  
そうそう、たくさん食べるの。お腹がすくもんやから。一升飯を一日で食べた。

私が中学生ぐらいの頃は、本当はこの瀬戸内海で泳ぎたかつたんです。でも、それが泳げなんだんですよ。塩田しとるおかげで。それで子供の頃は、海がもう憎たらしかった。みんな楽し気に泳ぎよるのになんでこんな作業せなあかんのや。海がないほうがよかつたな。でも、海は生活の糧ですしね。海水がなかつたら塩はとれんのやから。今から思うたら、恵まれとつたんやね、海水があるところ。

若い頃からつらい作業を経験されて、しかも、今はなくなつてしまつた塩田なのに、それでも伝承者として今も関わり続けておられるのはなぜでしょう？  
自分で塩田は好かんと言つたのにな。結局、血がそういう風になつてるんじゃないかな。父親の後ろ姿を見てきたからな。私も塩田の子です。

参加者の感想



復元塩田で昔ながらの塩田作業を体験し、使い慣れない道具や重い砂を運びながら、塩づくりの難しさや大変さを身をもって知りました。一方で、道具を体の一部のように使い、砂を軽々と運ぶ柏原さんは、本当に塩づくりが体にしみこんでいるんだなと。柏原さんの人生は、ずっと塩田に寄り添ってきたのだと思いました。そのように人生を通して磨いてきたものがある柏原さんからは自信や誇らしさを感じます。柏原さんにとって塩田は、まさに人生の一部なのだと思います。

